聖週間を振返って

〈聖週間のミサに与かって〉

三月二十日から聖週間に入り、主の受難の主日からイエス様のことを思い起こさせるイザヤ書の主のしもべの箇所が朗読されました。そして木曜日、イエス様は弟子たちの足を洗うことにより私たち信者の生き方を示してくださいました。金曜日、律法学者たちはうとましい存在であったイエス様を最低の人間として「まったくの無」にしたかったため、木にかけられるものは呪われるという十字架上で殺しました。しかしそれを甘んじて引き受けたのは父である神への従順であり父の道具としてありたかったイエス様の思いであったのです。

しかしイエス様は復活しました。このことは歴史的には証明できません。なぜならこのことは神秘体験だからです。でも実はこのことは間接的には証明できるのです。それはイエス様が復活したことを信じる弟子たちが教会を創り、その教会が世界にまで広がり、今もなお洗礼を受けイエス様の復活を祝っている現実が物語っているからです。

週の初めの朝早くマグダラのマリアが空の墓を見たとあるマルコの福音書を聞いた私たちが自分たちの生活の場で喜びをもってイエス様の復活を述べ伝えるのです。

今年の聖週間の林神父様の説教を聞いて、復活して常に私たちと共にいてくださり、こよなく愛してくださっているイエス様を私たちが述べ伝えることの大切さを新たにしました。

復活祭の日、銀祝を迎えられた林神父様を囲んで四年ぶりのパーティが催されました。久しぶりに懐かしい方々の顔も見られ、なごやかな雰囲気の中楽しいひと時を過ごすことができました。心か神様に感謝したいと思います。

（宣教委員　三好啓子）

「聖なる三日間のご説教のポイント

「聖なる三日間」は「出エジプト」に替わる新たな過越である「キリストの死と復活」を記念するための典礼です。聖書の「記念」には単に出来事を「思い起こす」だけでなく、その出来事がまた「現在化」するという意味が含まれています。「聖なる三日間」の典礼を執り行うことによって、「キリストの死と復活」が私たちの現在の教会の中に再起し現存するのです。

聖木曜日の「主の晩さんの夕べのミサ」は「最後の晩さん」を記念する典礼です。「最後の晩さん」においてイエスは聖体の秘跡の制定をされて、私たちに「ミサ」という最大の恵みを残してくださいました。この「聖体」は「最後の晩さん」を包み込んでいたイエスの「この上ない愛」が結晶化したものであるといえます。私たちはミサを通して、聖体を通して、今もイエスの「この上ない愛」を実感し、頂くことができるのです。

聖金曜日の第一朗読「イザヤの預言52章13節～53章12節」は「苦難の僕」と呼ばれている箇所です。弟子たちはここに預言されている「わたしの僕」の姿に十字架のキリストの姿を見出しました。この世的には敗北の象徴であった十字架を逆にキリストの勝利、栄光として崇めていったのです。それはまさにこの世的な価値観が逆転し、まったく新たな福音的価値観へと開かれていく、新しい世界の始まりでした。十字架を担って生きることは、この世的な価値観ではなく、福音的価値観に従って生きていくことなのです。

復活徹夜祭における復活のろうそく、この光こそが復活のキリスト、今も私たちの中に生きておられるキリストのシンボルで、復活徹夜祭の中心です。その光は聖堂の中だけで輝いているのではありません。聖堂の壁を貫いて、全世界に輝いているのです。それは新しい天地創造であると言えます。「光あれ創世記（1章3節）」神がこの世界を創造される際に最初に発したことば、それによって混沌の地に輝いた光、キリストはまさに復活によって、人類の混沌の歴史の中に新たな光、神の愛を輝かせ、世界を新たにされたのです。

（ご説教 林和則神父さま）

ご報告：宣教委　三好啓子